

## 杭州の洞窟聖地とその信仰について II

### Holy Caves and these Beliefs in Hangzhou II

須 永 敬

Takashi SUNAGA

#### Abstract

An understanding of holy caves and these beliefs of Hangzhou lead to an understanding of holy caves and these beliefs throughout East Asia. If a comparative study of holy caves and these beliefs in the Japanese Islands, the Korean Peninsula, and the China continent can be done, it will contribute to the development of the religious cultural studies of East Asia. In this paper, a view emerged of the geographic distribution of holy caves in Hangzhou. The religious culture of holy caves in Hangzhou (Jingu-dong, Yingu-dong, Woyun-dong, Chuanzheng-dong, Bei-Guanyin-dong, and Na-Guanyin-dong) are reported and analyzed.

Keywords: 聖地・洞窟・泉・観音・杭州

#### はじめに

本稿の目的は、前稿〔須永 2005〕において論じた西湖北岸地区の洞窟の追補報告をするとともに、新たに鳳凰山地区の洞窟について報告することにある。

これにより、西湖北岸地区において、現在までに確認できた全ての洞窟聖地の踏査・報告が完了することとなる。

また、鳳凰山地区においては、観音信仰を中心とした洞窟祭祀の様子が見られた。西湖北岸の洞窟聖地においても観音信仰の要素が認められるが、ここでは一層際立ったものとなっている。杭州には多くの洞窟が存在するが、その地域差の問題については、これまで触れられてこなかった。今後各地域における具体的な資料を収集することによって、杭州の洞窟聖地信仰の地域性の問題も浮かび上がってくると思われる。

そこで本稿では、先ず杭州市内の洞窟聖地の分布を概観したうえで、西湖北岸地区・鳳凰山地区の洞窟聖地の報告を行いたいと考える。

杭州の洞窟聖地の報告を積み重ねていくことは、中国の民俗宗教の特徴を知るために重要であるとともに、今後の朝鮮半島・日本列島の洞窟祭祀との比較考察を行ううえでの基礎的作業としても位置づけることができる。また、洞窟聖地研究の新たな資料と視点を提示することは、今後、東アジアの民俗宗教とその交流史を明らかにする上でも意義ある試みであると考えられる。

#### 1. 杭州における洞窟分布

杭州の洞窟を知る上での主要文献は地誌類である。例えば『咸淳臨安志』（1268）巻 29「洞 域内外」の項には 21 箇所、『淳祐臨安志』巻 9「諸洞」の項には 20 箇所の洞窟が記されている。中には洞窟名のための記述や杭州郊外の洞窟が含まれているが、当該地域の洞窟についてのまとまった記述としては最も古い資料である。

その後の文献としては、『西湖游覧志』（1547）、『湖山便覧』（1765）、『西湖新志』（1921）などが挙げられる。また、近年に至って『杭州市志』、『杭州的山』が発刊された。特に『杭州的山』には計 28 箇所の洞窟が記されており、洞窟聖地の信仰を知る上での貴重な情報を提供してくれる。

歴代地誌類の洞窟記述の比較については、次稿にゆずるが、記載される洞窟はその時々によって取捨選択されており、両『臨安志』と『西湖游覧志』の間、『西湖新志』と『杭州的山』の間には採録される洞窟に大きな変化が認められる。このため、前掲書全てに共通して登場する洞窟は 10 箇所にも満たない。また、過去の地誌に記された洞窟名と、編纂時の洞窟名との混乱といった要因から、重複して記載されてしまった洞窟も少なくない。

このようなことから、過去の地誌類に記された洞窟数やその分布を単純に示すことには、資料的限界が指摘できるのだが、このような問題点を考慮した上であれば、杭州市域における洞窟聖地の総数と分布の傾向を捉えておくことは、信仰の地理的な広がりを確認する上でも必要な作業ではないかと考える。

そこで、上記文献に記述されている洞窟から杭州郊外のものを除き、なおかつ現時点で場所が確認できるものを選び出

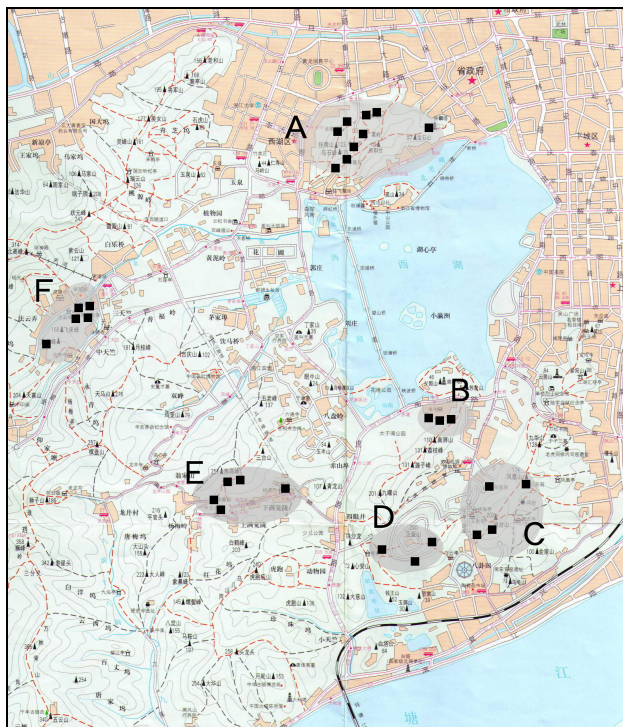


図1 杭州市における洞窟分布図

(「杭州市区山径図」〔馬 2003 付図〕をもとに須永が作成)

すと、29箇所の洞窟を挙げることができる。この29箇所を杭州市域の地図に「■」印でマークしたのが図1である。

この分布を見ると次のような点に気付く。ひとつは、西湖の三方に連なる多くの山のうち、洞窟が分布する山は一部に過ぎないということである。もうひとつは、杭州市域の洞窟分布がおおよそ6つのブロックに分けられることである。ここでは仮に地図上部から時計回りに、A「西湖北岸地区」、B「浄寺地区」、C「鳳凰山地区」、D「玉皇山地区」、E「南高峰地区」、F「靈隠寺地区」と名付けておきたい。

では、上記の点をどのように捉えたら良いのであろうか。もちろんこのような分布には地質的な要因もあるであろうが、その宗教的背景についても注目していかなければならないであろう。

洞窟聖地を扱う際、理解の前提としなければならないのは、天然であれ人工であれ、その洞窟を誰かが何らかの理由・目的によって聖性のあるものと判断しない限りは、洞窟聖地とはなり得ないという点である。今回取り上げる川正洞のように洞窟とは言い難いものが「洞」と名付けられ、仏像が彫られ、信仰の対象になる例もあれば、どんなに大きな洞窟であっても、名もなく、記録されることもないものもある。このような、洞窟に聖性を認める存在として、その時々、宗教者の果たした役割は大きかったと考えられよう。ここに提示した洞窟聖地の分布を解明するためには、今後このような宗教的背景に注目していくことが必要であろう。

## 2. 西湖北岸地区の洞窟聖地

ここでは、前稿に引き続き西湖北岸地区の洞窟聖地について報告したい。前掲の分布図を見てもわかるように、杭州においてもっとも集中的に洞窟聖地が分布しているのが、この西湖北岸地区である。現時点で確認できた洞窟は9箇所であり、本稿を以て当該地区の全ての洞窟の踏査報告が完了することとなる。

なお、以後の各洞窟名称前の記号は、その地区記号をアルファベットの大文字で記し、地区内の別を小文字で記したものである(例:A-b)。また、西湖北岸地区の洞窟については、前稿の記号(a-e)をそのまま生かし、それに続けて報告をしたい。



図2 西湖北岸地区の洞窟分布図(原図は〔馬 2003 26〕)

### A-f.金鼓洞(jingu-dong)

金鼓洞内には3箇所の祭壇が設けられている。洞窟入口に置かれている祭壇には「純陽祖師」像が、洞内左手には「地藏菩薩」図が、洞内中央壁面には「太上老君」を祀る祭壇がそれぞれ祀られている。「純陽祖師」と「太上老君」像にはいずれも赤い衣が着せられ、肩には「南無純陽祖師」「南無太上老君菩薩」と書かれた白い布が掛けられている(写真2)。

「純陽大師」像の周りには小さな観音像や関羽像が祀られているが、これらは、家から「開光」するために祀られたものや、祀り手が引越をしたり亡くなったため洞窟に持ち込まれたものである。これらの祭壇、神像はいずれも新しく作られたようである。「太上老君」の横の壁からは水が染み出しており、その下部には祭壇を思わせる四角い岩も見られるが、これがかつての祭壇であったかどうかは分からない。

また、金鼓洞の向かって左には「金果泉」という泉が湧いており、かなりの水量をたたえている。泉上の岩に「為民飲水」の字が彫られているように、昔はこの水も飲むことができた



## 杭州の洞窟聖地とその信仰について II

いうが、今は濁って飲めなくなってしまったという（写真3）。

花が供えられていたり、明らかに現在でも信仰されている様子が分かるのだが、筆者が訪れた際には洞内に避暑にやってきた人しかおらず、その詳細を聞くことはできなかった。

また、金鼓洞の向かって左側には、「観音岩」と呼ばれる庵があり、岩崖をくり抜いて作った人工の2つの石室のなかに観音菩薩と送子観音が祀られている。

ここに祀られる観音菩薩像は、4～50年前に土中から発見されたものと言い、次のような話が伝えられている。ある老人が山のなかで観音菩薩像を見つける夢を見た。それを不思議に思っ  
て実際に山に登り、草むらのなかを歩いてみた。すると、夢で見たのと同じ場所の土から光が出ているのを見つけた。その土を掘ってみると、額から光を放っている観音像を発見した。その発見した場所が現在の「観音岩」であり、祀られているのは発見された観音像であると言う。

観音岩は、付近に住む14人ほどの老女たちによって管理・運営されている。このうち2人ずつが当番となり、毎日7:00から夕方まで参拝者の世話をしたり、仏前で経を唱えたりする。また、時には金鼓洞の掃除もしたりする。祭日は、毎月1・15日と中秋、2月・6月・9月の19日（それぞれ観音得道日・観音出家日・観音誕生日とされている）である。祭日には45人くらいの信者が集まってくるが、特に9月19日の観音誕生日には方々から100人ほどの人が参拝に訪れるという。

さて、金鼓洞は『西湖游覧志』（1547）に次のように記されている。

嶺北有金鼓洞、昔人伐石其間、聞金鼓下作、乃止。〔『西湖游覧志』卷九〕

これは一種の地名起源伝承となっている。金鼓洞の名は、昔の人が石を切り出している際に金鼓の音がしたのを聞き伐石を止めたことに因むというのがその内容である。

また『湖山便覧』（1765）には、

在劍門関南。昔人伐石其間、聞金鼓下作、乃止。洞口有石泉、渟涵深窈莫測。金志章、金鼓洞、飄渺野鶴林、高出衆木上。石洞何嵒岬、鬼斧劈千丈。不聞金鼓声、但聽流水響。〔『湖山便覧』卷五〕

とあり、先述の『西湖游覧志』の地名起源伝承を再録するとともに、洞口の泉、即ち今の金果泉について、静かに水をたたえ深さも計り知れないと言及している。また、金志章が伐石と金鼓の伝承、そして流水の響きを聴いた詩を引用している。



写真1 金鼓洞と観音岩（写真左上）



写真2 金鼓洞の祭壇



写真3 金果泉

また、『春在堂隨筆（選）』（1899）には、金鼓洞内に道士がいたことが記されている。

金鼓洞・廃太甚、有兩道士居洞中、衣服挾斯、發・・然、殊可憎惡。昔人改郭景純詩云、青溪三千仞、中有二道士。輒誦斯言、一笑而出。

ここに現れる金鼓洞は、草に覆われ廃れてしまった姿である。洞中の2人の道士が衣服を洞内に挟み置いたり、髪がぼさぼさになっている様を見苦しく思い、郭景純（郭璞）作「遊仙詩七首」の「青谿千餘仞、中有一道士。」のパロディーを作り、笑いながら洞窟を後にしたというのがその内容である。この文では蔑みの対象となっている道士ではあるが、少なくとも当時（19世紀末）には、道士が金鼓廟の信仰に関与していたことがわかる。このことは、現在の金鼓洞で「太上老君」「純陽祖師」といった道教的な神が祀られていることとも関係があるかもしれない。

また、『西湖新志』（1921）には伐石伝承についての疑念が記されている。

西湖遊覽志、栖霞峰北有金鼓洞、昔人伐石其間、聞金鼓下作、乃止。西湖覽勝志、在懶雲窩亦栖霞峰古迹之一、在紫雲洞下半里許。之頂、覆石如屋、中有小龕、可坐。按、栖霞峰後有洞五。栖霞、紫雲、金鼓、蝙蝠、无門是也。西湖遊覽志但称金鼓、昔人伐石云々、而不言何時伐石。扨、玉牒初草、嘉定中、詔臨安府、北山劍門峰毋得伐石、慮泄山川之氣。知伐石事在宋嘉定時、可知峰北五洞皆因伐石而成、不独金鼓為然也。〔『西湖新志』卷一〕

著者の胡祥翰は、「玉牒初草」に、南宋の嘉定年中（1208～1224）山川の気を通すことを考慮して嶺の伐石を止めさせた詔の記述があることを示し、嶺北五洞はどれも伐石によってできたものであり、ひとり金鼓洞のみではないと記している。

ただし、胡の示した嘉定年間から50年ほど下った『咸淳臨安志』に栖霞洞と蝙蝠洞の記述があるが、いずれも伐石に関する記述はなく、全ての洞窟が伐石によってできたと断じるのは難しいであろう。

### A-g. 銀鼓洞(yingu-dong)

金鼓洞から北側に5分ほど歩いた所に位置している。横8m、奥行き4m、高さ3mほどの岩肌をくり抜いたような洞窟である。洞窟の左側には泉があり「銀鼓洞泉」と書かれている。洞窟内部左壁には「純陽祖師」を祀る祭壇があり、周りには釈迦や観音の陶製像が置かれている。また、洞窟入口上部の壁には3体の小さな仏像が彫られており、前庭には蝋燭を灯す台な



写真4 銀鼓洞

どが置かれている。

前庭の脇には、銀鼓洞修復の寄付を募った際に建てられたと思われる石碑「銀鼓洞募捐碑」（1992年9月19日建立）の一部分が捨て置かれている。石碑は割れてしまっておりその上部しか残っていないが、銀鼓洞が宗教的理由によって1992年に一旦復興していたことが分かる。また、通常このような石碑が建てられるのが祭日であることを考えれば、金鼓洞同様の観音信仰（金鼓洞観音岩では9月19日を観音誕生日としている）が基本にあったことが窺い知れる。また、「純陽祖師」像が祀られるなど、恐らく今日の信仰面においても金鼓洞と同じ宗教者が関与している可能性が高い。

現在も銀鼓洞に参拝する人もいるのであろうが、筆者が銀鼓洞を訪れたときには、カードや麻雀をしながら涼む人で賑わっていた。

管見の限りでは、この銀鼓洞について言及した文献はなく、宝石山散策の便宜を図るための道標にその場所が記されているのみである。既に16世紀の記録に現れる金鼓洞とは対照的といえる。恐らくは近くの金鼓洞の名にちなんで銀鼓洞の名を付けたのであろうが、その歴史的経緯を知ることは難しい。

### A-h. 臥雲洞(woyun-dong)

「杭州黄龍洞門縁民俗園」の山側入口から入り、坂を降りていく途中にある。現在洞窟は民俗園の管理下に置かれている。洞窟の入口は龍の胴体の作り物で飾られているが、恐らくはここが民俗園の敷地となった際に作られたのであろう。洞内は崩落の危険があるという理由で立ち入ることはできない。入口も写真5のようにセメントで塞がれており、洞窟内部の様子もうかがい知ることにはできない。ただその入口横の岩に刻まれた「臥雲洞」の3字によってその存在を確認するに止まる。

『中国名窟名洞辞典』「臥雲洞」の項には、洞窟の長さは30メートル以上、幅はわずかに数メートル。2つの口があり相通じており、火山岩の崩れた岩洞となっているとある。また、臥



雲洞の言い伝えとして、かつて広東羅浮山の道士梁臥雲がここに居て、黃龍洞院を復興したので、彼を記念して名を付けたという話が紹介されている〔王 2003 61〕。

#### A-i.川正洞(chuanzheng-dong)

保俶塔の西側に位置している。巨石が覆い被さるようにして1つの洞を作っている(写真6)。周囲には屯霞石、寿星石を始めとする巨岩が多くあり、そのうちのいくつかにはかつて仏像が彫られていた跡が残っている。恐らくは文化大革命の際に削り取られてしまったのであろう。

巨石の下には数人が入れるほどの空間があり、三方に道がついている。北側の岩壁には写真のような祭壇状の加工が施されており、数体の仏像が彫られていた跡が残っている(写真7)。これもまた文革の際に削り取られたと考えられる。

巨石の1つには「正徳庚辰」(明:正徳15年・1520年)の年号が読み取れる題刻があるが、川正洞との関係は不明である。なお、先述の祭壇左上には「川正洞」の3字が彫られているがこれは近年のものと思われる。

現在では信仰の対象とはなっておらず、洞内に設けられた石作りのベンチでハイキングの休憩をする人などが見かけられた。

また、地誌の類でこの川正洞について言及したものはない。周囲の巨石や磨崖仏、かつてここにあった寺院などについての総合的な知見から考察を進めるほかに、その詳細を知る術はないと思われる。



写真5 臥雲洞



写真6 川正洞

### 3. 鳳凰山西麓の洞窟聖地

鳳凰山地区においては、西麓の北観音洞および南観音洞を踏査することができた。この両洞は同じ観音洞の名を持つが、それぞれ別個の信仰内容を持っており、一体の関係にあるわけではない。信者も異なっているが、互いに自分たちの祀る観音洞と別の観音洞があるということは認識している。

また、西湖北岸地区のような観光地やハイキングコースでもなく、よほど特別な事情がないかぎりには訪れない場所に位置している。そのため、これまでみてきた洞窟群に比べて、宗教性の強い点が特徴的である。

#### C-a.北観音洞(Bei-Guanyin-dong)

北観音洞は3つの洞窟から構成されている。まず1つは、中央にある洞窟である。この洞窟は通常の洞窟祭祀同様に、祭壇が設けられ、そこに観音像が祀られている(写真9)。ここが北観音洞の祭祀の中心となっている部分である。

この洞窟の左側には、観音が修行をしたというもう1つの洞窟がある。縦に亀裂が入ったような岩であり、高さは4mほど



写真7 川正洞祭壇跡





図3 鳳凰山地区の洞窟分布図（原図は〔馬 2003 58〕）

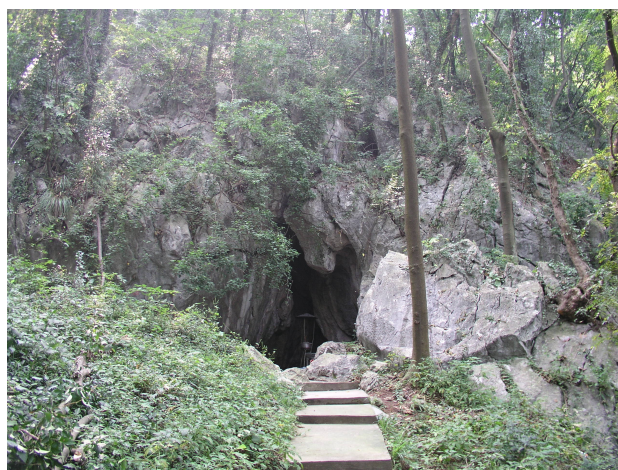


写真10 北観音洞右側の洞窟（観音の治療室）

あるかと思われるが奥行きは狭い。この洞窟は観音が修行をした窟であると伝える。また、この北観音洞には大きな観音と小さな観音の2人の観音が居ると伝えられており、このうち洞窟で修行したのは小さな観音のほうだという。

この両洞窟の前には前庭が広がっている。伝承では、昔ここに大きな寺があったという。

前庭から右手（南方向）に続く道を歩くと、正面に口の開いた岩がある。この洞窟は観音の治療室であるという（写真10）。この洞窟で、観音が病気に悩んでやってきた参拝者を治療してくれるのだという。洞窟の規模は3つの洞窟の中でもっとも大きく、奥行きは8mほどと思われる。洞窟の奥には外の光が入らず真っ暗な状態であるが、最奥部に設けられた祭壇には観音像が祀られており、蠟燭が灯っていた。この蠟燭を灯しているのは、北観音洞近くの別荘街に住んでいる台湾の人で、毎朝早く、人を頼んでこの祭壇に灯明を灯して病気が治ることを祈っているのだという。

以上のように、北観音洞は、祭祀（中央）、修行（左）、治療（右）とその機能と信仰を異にする3つの洞窟から構成されているのである。

北観音洞の祭日は、2月19日、6月19日、9月19日で、主に病気で苦しんでいる人が参拝に訪れるという。また、病気が治った人も感謝を捧げにやってくる。

この北観音洞について記した文献は管見の限りでは無い。歴史的な資料としては、中央洞窟のある岩壁に彫られた民国庚申年（1920）の石刻がある。文革によるのであろうか、僧の名など、碑文の所々が意図的に削られており不明な点も多いが、宣統3年（1911）と民国3年（1914）の2度にわたって僧侶の寄付がなされたこと、李福興ほか3名とその弟子10名によって建てられたことが記されている。また、同じ岩にはもう1箇所の石刻があるが、こちらは全文が完全に削られてしまっている。

洞窟が祀られた史的な経緯について知ることは難しいが、今



写真8 北観音洞（写真左奥と中央に洞窟がある）



写真9 北観音洞中央洞窟の祭壇



日でも信仰の対象として存在している点は、観光地化が進む杭州の洞窟のなかでも希な事例であるといえる。

### C-b.南観音洞(Na-Guanyin-dong)



写真 11 南観音洞の岩と祭壇



写真 12 南観音洞内部の祭壇

南観音洞は、将台山の麓、玉皇山隧道を南へ抜けてすぐの所に位置している。小さな庵のような建物があり、そこを通り抜けたところに南観音洞がある。

洞窟の横には観音像を祀る祭壇があり、その左側の岩の凹部には沢山の観音像が置かれている（写真 11）。これらはどれも家庭から持ち込まれた観音像だと思われる。ここも北観音洞と同じく今日も信仰の対象となっており、観音祭日などには多くの人が集まってくるという。

洞窟は、祭壇右手の階段を少し下ったところにあり、数人が入れるほどの空間がある。洞内中央奥には近年作られたと思しきセメント製の欄干のような装飾があり、その上に観音像が乗

せられ、祀られている（写真 12）。

馬によれば、洞窟両側岩壁には、南宋の開禧年間（1205～07）から明の弘治 7 年（1494）に至るまでの羅漢・観音・文殊・普賢などの像（高さ 40cm ほど）が 40 体あったが、歳月による風化や雨による浸食、そして文革期の破壊などによって破損が甚だしいという〔馬 2003 81〕。この摩崖仏について筆者は確認することができなかった。洞窟入口の岩には観音像と「南観音洞」の 4 文字が刻まれているが、いずれも近年のものと思われる。

また、洞窟の右手には抗日戦争の際に用いられたという大きな防空壕があるが、現在では物置として使われている。

先に引用した馬の報告によれば、13 世紀初頭から 15 世紀末まで盛んに信仰されていた様子が窺い知れるのだが、そのことを伝える文献資料は管見の限り見られない。

### おわりに

以上のように、本稿では杭州の洞窟聖地の分布傾向を明らかにしたうえで、西湖北岸地区、および鳳凰山地区の洞窟聖地の報告を行った。この新たな資料を踏まえた上で、前稿〔須永 2005〕で挙げた杭州の洞窟聖地の特徴を再確認したいと思う。

まず 1 点は、洞窟と宗教者との関係である。前稿では、かつては寺庵もしくは廟とともに存在していた洞窟があることを指摘し、黄龍洞と護国仁王寺、栖霞洞と栖霞廟・妙智寺、香山洞と香山寺がこれに該当すると述べた。本稿で報告したなかでは、川正洞と北観音洞、南観音洞がこれにあたり、洞窟聖地に付随する宗教施設との関係の重要性を再確認できた。

さらに、金鼓洞、銀鼓洞の事例では道士、北観音洞では僧侶が信仰に関与している様子が窺えた。洞窟聖地をいかに解釈し、どのような神仏を祀るかという点においては、道教、仏教といった成立宗教の宗教者の影響をさらに注視していく必要がある。

第 2 には洞窟と泉の関係である。前稿では、紫雲洞の「七宝泉」、香山洞の「観音水」、栖霞洞前庭の井戸の存在を指摘し、洞窟における水場の存在が洞窟の宗教的位置づけを考える上で決定的な要素となっているように思われると述べた。本稿においては金鼓洞の「金果泉」、銀鼓洞の「銀鼓洞泉」がこれに当たる。

しかし、同時に考えなければならないと思われるのは、川正洞のような水場のない場所が「川正洞」と名付けられ、祭壇が設けられていたという事実である。洞窟が聖地として認識されるうえで、泉や水場の存在が大きな要因となることは疑いのない点であるが、逆に言えば川正洞のような水場のないところが聖地とされるに至った背景には、強い宗教的な動機付けがあつ

たことが窺える。この点は第1点目の洞窟と宗教者との関係という問題とも通じる問題であるが、洞窟が何を以て聖地とみなされるのかという根本的な課題に通じる点として指摘できるであろう。

最後に、洞窟と観音の関係である。前稿では、紫雲洞、栖霞洞、香山洞の事例を挙げ、観音信仰と洞窟との関係について指摘し、この観音信仰が、中国の一般的な観音信仰の延長線上にあるものなのか、それとも洞窟の信仰としての特徴を有するものなのかという課題を提示した。この点については本稿においてもまだ課題のままとなっている。しかし、金鼓洞の観音岩、北観音洞、南観音洞における洞窟と観音信仰との関係を見るなかで、観音信仰というものが必ずしも単一の信仰ではなく、多様な信仰であるということが確認できた。

たとえば、金鼓洞観音岩では、霊夢に現れた観音の伝承があるとともに、「送子観音」という子授けの観音が祀られている。また、祭日のあり方も、中国では多くの場合、2月19日（観音誕生日）、6月19日（観音得道日）、9月19日（観音出家日）とされているのが、ここでは2月19日（観音得道日）、6月19日（観音出家日）、9月19日（観音誕生日）であり、9月19日の観音誕生日が最も賑わうとされている。

また、北観音洞では、小さな観音と大きな観音の2人の観音が居るという伝承があり、3つの洞窟も観音の修行窟、観音の祭壇、観音の治療室といった区分がされていた。

このような観音信仰の多様性には、各地域の民俗宗教の独自性や、洞窟聖地という特色が色濃く表れていると考えることが出来るであろう。さらに事例を積み重ねていくことで、中国における民俗宗教としての観音信仰、さらには洞窟祭祀における観音信仰の特色といったものが明らかになってくるのではないかと考える。

## 参考文献

- 王仲奮（編） 2003 『中国名窟名洞辞典』 中国旅游出版社  
 須永敬 2005 「杭州の洞窟聖地とその信仰について I」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』 54  
 馬時雍（編） 2003 『杭州的山』 杭州出版社

## 資料

- 『咸淳臨安志』宋：潜説友（纂）1268（咸淳4）（中国地誌研究会（編）『宋元地方志叢書』7 1978 中国地誌研究会）  
 『淳祐臨安志』宋：施諤（撰）（中国地誌研究会（編）『宋元地方志叢書』7 1978 中国地誌研究会）  
 『西湖游覧志』明：田汝成（撰）1547（嘉靖26）第九卷（1983）『景印文淵閣四庫全集』571 台湾商務印書館  
 『湖山便覧』清：翟灏等（輯） 1765（乾隆30）（1983 『中

国方志叢書』華中483 成文出版社）

『春在堂隨筆』清：俞樾 1899（光緒25）（1999 『清波小志』上海古籍出版社）

『西湖新志』民国：胡祥翰（輯）1921（1998 『湖山便覧』上海古籍出版社）

## 謝辞

中国杭州市での現地調査においては、浙江工業大学外国語学部学生の許倩、黄巧巧、孫青青、李蕾の各氏に通訳の労を執っていただいた。ここに心から感謝申し上げる。

なお、論文中の資料引用部分において「島根県立大学 e 漢字フォント」を使用させていただいた箇所があることを記し、関係機関とご担当者の方々に感謝申し上げます。

（提出期日 平成17年11月28日）